

新しき年

小松 理英子 北海道

果実酒のやうな味はひもつ酒を屠蘇に使ひて新しき年  
すきとほる夜空にオリオン三つ星が気合を入れてかがやいてゐる  
電線にとまるカラスの重さだけ伝へられないことがくやしい  
氷点下つらの先の水滴が落ちるか凍るかまだ迷ひゐる  
流行語大賞のそのほとんどが分からぬ側に仲間入りする

東北に春

薄葉 茂 宮城

しがみつく虫の姿を窓越しに見つめる先の冬のあをぞら  
三月はあの日を挟んで折れ曲がり過ぎればやつと東北に春  
落ちつかぬところを映す色をなし冬の大きな虹が立ちをり  
シニアとふ呼称のありて四月から正社員らの隙間を埋める  
マンションの更新された照明がやけにくつきり闇夜にうかぶ

眠り上手

黒岡 美江子 千葉

深呼吸吸四、五回すればもうあした眠り上手な老人われは  
佗助と寒椿のあひ行き来してつがひの目白朝の蜜吸ふ  
裏庭に藍花あまばな咲けば思はるも藍を残して草取りし夫  
庭見れば草取りの夫鳥見れば餌やりの夫 漠々とひとり  
ダイヤモンド婚を元気に通り過ぎ逝きたる夫の介護を知らず

二月のさくら

印 出 美由紀

神奈川

白磁の皿に盛られしままのヨーグルトその白さほど冷ゆるかぎろひ  
買った靴をそのまま履いて帰るみち月が東をかへり見てゐる  
ひんがしを月は振り向くフェルメールの青ターバンの少女のまみで  
海底で月満ち来るを待つてゐる珊瑚のやうな二月のさくら  
カーテンを開ければ逃げてゆく鳥の声ほどの距離さいはひまでは

みどりの玉電

近 藤 哲 夫

神奈川

小太りの土竜が腰をふるやうなみどりの玉電ゝわすれてゐない  
品川の海風ひかるゼームス坂ジェームス坂でないのがおしやれ  
善勝寺慈光幼稚園かはらずときけば帰らな午睡のときに  
若き日にいつぺん巻いてみたかつた赤い手拭マフラーにして  
アマゾンにあれど頼まず『我が愛する詩人の伝記』あまりに廉し

しづかな時間

前 中

映 東京

こいつとは一生うまくやれないと思つた人も来る忘年会  
いも天といなりでいよよゆたかなるさぬきうどんの炭水化物  
文具屋とカフェに領土を削られて有隣堂書店見るかげもなし  
黄金湯に有馬記念を見届けた人がジャージを脱ぎはじめたり  
少しづつポストイットが減つてゆく冬の窓辺のしづかな時間

暗渠

水辺 あお 静岡

ろくろ首ならぬしゆるしゆる長き胴キース・ヘリング描くブレイキン  
核戦争するかもしれぬ大国が山火事ひとつ消せずにをりぬ  
ふるさとは天界よりも遠くあり復興遅き避難所の冬  
目に見えぬ暗渠刻々古い朽ちぬ道路も国の仕組みも人も  
このごろは豆撒く人の声あらず太巻き銜へ口閉ざすらし

松竹錠

森田 治生 三重

青い鳥を殺めしマスクはアメリカをツイッター社のやうにするのか  
名を知らず世話になりたる松竹錠かつて風呂屋でいま居酒屋で  
言ふほどのことにあらねどこの星をひよいと離るるジャンプ一秒  
店閉ぢしビッグボーイの店先の少年ポビーはいづこに行くや  
ほとんどが記憶に残らぬ日をおくる童女のざざめく声家に満つ

そのうちに

藤岡 成子 兵庫

うつくしきこふのとり撮る人たちのかたはらに来るはしぶとがらす  
十二度の寒の陽射しが連れ出しぬ籠もりつばなしのとなりの老いを  
とりあへず洗濯しようそのうちに晴れてくるはず空も心も  
ちかごろは英語の略語おほすぎるここはそらみつ大和の国ぞ  
供へるけど結局わたしが食べるからバレンタインのチョコはブランド

気張りんしやい

有川 知津子 福岡

行くたびにスマホの故障を父は言ふゆびにちからの入らぬものを  
わだつみの廻すろくろや足もとにねつとりと冬のさざなみは寄る  
島外の病院へ父を移すためドクターヘリが使へるといふ  
空荒れて視界不良の月曜日 父を運ばんへり欠航す  
うすあをき夢のなかにて目覚めたり気張りんしやいといふこゑがして

鏡掛け

今泉 洋子 佐賀

寒の夜は湯湯婆ゆたんぼよりも温かし猫といつしよに布団に入れば  
シロウオを踊り食ひする春昼の喉のどはしばし川のごとしも  
悲しみを零すごとくに降る雪をひとり見てゐる立春の朝  
真白なる羽毛襟ホ巻つけて行く白秋の生誕百四十年祭に  
若き日の母が刺したる鏡掛け刺繡の鶴を寒夜思へり

父の土地

海老原 光子 宮崎

均されて売地となりし父の土地買ひ手つかねばそれなりに寂し  
オオバンの三羽が寄れば鴨、小鴨ついつと分かれる境界なき水  
箱車の中に七人でこぼこのもいろの帽子運ばれてゆく  
恩愛のすべてを断ちて出家せし友へうへうとわが前に立つ  
母よりも父恋ふること多き日々「コスモス」届けばなほさら恋し